

はじめに

本書は、二〇一一年から二〇一三年までの二年間にわたり、「本願寺新報」の紙上で「ごんぎょうせいじんWhats 勤行聖典」と題し、『浄土真宗本願寺派 日常勤行聖典』の解説として掲載していたものをまとめたものです。

その執筆にあたっては、「聖典とは何か」「おつとめの意味」「聖典に説かれている内容」などの幅広い観点から、できるかぎり専門用語を使わないようにして解説をして欲しいとのご依頼でした。

聖典に説かれている内容は不変の真実ですが、漢文や古文で記されていますので、それをどのようにしてお伝えするか、現代の感覚や言葉との狭間で、随分と頭を抱えておりました。しかし、こうした取り組みが大切であると思っておりましたので、誤解を恐れず、思い切った表現や例えを用いて執筆しました。

ときには聖典の解説という枠組を超えて、何億光年もの彼方に輝く星々に私たちの生死の姿を重ね合わせたり、遠く二千五百年前のインドをはじめ、中国、日本の各地に現存する聖跡を訪ねたり、また、ありふれた日常の出来事のなかで、浄土真宗の教えに触れてみたりしました。

本連載の終わりに「活いきている言葉」「であいのはじまり」と題して記しましたように、本書が一人でも多くの方々に、浄土真宗とのであいはじまりとなる機縁となることを願うばかりです。

最後に、貴重な写真を提供して戴いた丸山勇先生、佃法雄先生、そして、本願寺出版社のご厚意に心より御礼申しあげます。

二〇一五年五月一日

筆者識

目次

はじめに	1
浄土はあるの？ 「ある」「ある」でも大違い	11
阿弥陀仏の浄土は西に 夕日の沈むところ	14
阿弥陀仏の浄土の名は 「極楽」は固有名詞	17
私の考える真実 美味しい？ 不味い？ どっちがホント？	20
真実とは何か 知っているから伝えられる	23
阿弥陀仏と積尊 二千五百年の時を超えて	26

おつとめする意味

聖典とは 八万四千の説法……………	29
おつとめする意味 優しい心遣いに応える言葉は？……………	32
仏の名に込められた心 限りない光といのち……………	35
お仏壇のある風景 仏さまはお昼寝？……………	38
ブツ・ポウ・ソウ 季節の移ろいのなかで……………	41
自力ということ 聞法のいとなみ……………	44

正信念仏偈のこころ（仏説無量寿経の教え）

正信念仏偈の伝えるもの 仏説無量寿経と七高僧……………	47
六字の名号の意味 南無するのは私？……………	51
法蔵菩薩と阿弥陀仏 仏さまにも個性がある？……………	54
ゆるぎない法蔵菩薩の決意 劫つてどれくらい？……………	57
阿弥陀仏の十二の光 超日月光といわれる意味……………	60
お念仏するとき 心のなかは上の空……………	63
往生と成仏 お浄土の道は渋滞中？……………	66
阿弥陀仏の本願海 純粹な気持ち？……………	69
満ちわたる光 心にかかる雲……………	72
一輪の清らかな花 太古の眠りから目覚めた「大賀ハス」……………	75
信心とは 信じてるってホント？……………	78

正信念仏偈のこころ（七高僧の教え）

龍樹菩薩の故郷 湖に浮かぶ遺跡……………	82
煩惱というレンズ 彼方に見える蜃気楼……………	86

天親菩薩の偉業	世界最古の学舎	89
美しい浄土の景色	無数の輝きを放つ宝石	92
法灯は曇鸞大師に	絶壁に輝く灯明	95
本願他力の教え	救いは時を超えて	98
激動の世の道綽禅師	滅び行く母国	101
時代の潮流のなかで	釈尊の言葉の深意	104
多才な善導大師	大唐時代の幕開け	107
逆巻く大河の狭間で	確かな大道	110
源信和尚と母君	源氏物語のなかの和尚	113
地獄の世界から	煩惱にまみれる姿	116
父の遺訓と源空聖人	艱難辛苦の先に	119
源空聖人と親鸞聖人	邂逅と別離	122

三帖和讃の教え

浄土真宗の詩	和讃撰述のおこころ	125
言葉に託す思い	真実を伝える工夫	128
奥深さと易しさ	詩句になるまで	131
一貫する詩句	重ねて詠うところ	134
あふれでる思い	最晩年の詩句	138

讃仏偈・重誓偈・十二礼の教え

康僧鎧という名の僧	三国志の強豪、魏の国	141
阿弥陀仏となる決意	讃仏偈のこころ	144
願いは、はたらきとなって	躍動する真実五願	148
重ねて誓われる願い	溢れでる念仏	152

回向ということ	まわす向ける？	156
願われている喜び	釈尊から龍樹菩薩へ	159

仏説阿弥陀經の教え

偉大なる訳経僧	鳩摩羅什の生涯	162
祇園精舎の由縁	長者スダッタの志	166
舍利弗に語られる教え	釈尊の出世の本意	170
無数の称讃のなかで	響きわたる本願	173

蓮如上人の教え

動乱の世を生きる	再興への歩み	176
母から託される思い	心に響く御文章	180

聖人一流章のころ	信心と念仏	184
信心獲得章のころ	名号のはたらき	187
末代無智章のころ	託すということ	190
八万法藏章のころ	ものしりがほの風情	193
白骨章のころ	無常の風のなかで	196
領解文のころ	唯円房の問い	199

であいのなかで

親鸞聖人のお手紙	寄り添うということ	203
麗しい音色	奏でられる本願	207
恩徳讃のころ	身を粉にしても	210
讃歌に寄せて	歌う姿には	214

活きている言葉	聖典拝読の姿勢	217
であいのはじまり	聞信する姿	220

付録

年表	224
地図	227

本書に引用した各種聖典の表記は以下の通りです。

- ・『浄土真宗聖典（原典版）』↓『原典版』
- ・『浄土真宗聖典（註釈版）』（第二版）↓『註釈版』
- ・『浄土真宗聖典 七祖篇（註釈版）』↓『註釈版（七祖篇）』

浄土真宗の意味

浄土はあるの？

「ある」「ある」「でも大違い

「浄土真宗」は、親鸞聖人を開祖とする宗派であるということは広く知られていますが、この言葉には、この他にも大切な意味が込められています。

それでは、まず、「浄土真宗」の「浄土」ということについて、皆さんと一緒に考えてみましょう。この「浄土」という言葉は、文字通り「（煩惱に汚れていない）清らかな世界」ということを表しています。阿弥陀仏のおこころが綴つづられている「浄土三部経」の中にも、「浄土」について、次のように記されています。それは、「私たちを救い取って、さと



りを開かせるはたらきがそなわっている世界である」ということです。

さて、現代の私たちは、このような「浄土」の様子を聞いて、どのように受けとめたらよいのでしょうか。なかには、「浄土はどこにあるのか」「浄土は存在するのか」という疑問をもつ方もいらっしゃるかもしれません。

実際にハッブル宇宙望遠鏡などを使って、宇宙の彼方の恒星や星雲を観察するように、「浄土」を見ることができるようなら、その存在を確認できるかもしれません。しかしながら、どれほど優れた望遠鏡を用いたとしても、「浄土」を見ることはできません。なぜなら、「浄土」

は、私たちのいる世界とは異なっているからです。

夜空に浮かぶ美しい星々の輝きは、何億光年という気の遠くなるような時間をかけて、地球にたどり着いています。ところが、その光が地上にとどく頃には、すでに消滅している星もあります。私たちが見ている星々のすべてが実在しているわけではないのです。

夜空の星々も、それを地上で見ている私たちも、すべてのものは生まれてはやがて消えていきます。「浄土」が望遠鏡でとらえられるような世界であるのなら、夜空の星と同じように、やがて消滅してしまうことでしょうか。

このように、私たちの世界のなかでは、どのようなものであっても、永遠にあり続けることはできません。ですから、お経には、「浄土」は、私たちの世界とは異なっていて、私たちのものの見方や考え方ではとらえることのできない「さとりの世界である」と説かれています。そして、それは「生まれてはやがて消えていくという世界のなかにいる私たちを救い取ってさとりを開かせる」ために「ある」世界ということなのです。

阿弥陀仏の浄土は西に 夕日の沈むところ

西方浄土。

皆さんのなかには、聞き覚えのある方もいらっしゃるのではないのでしょうか。「おつとめ」のなかやご法話のなかで、たびたび出てまいります。「西方浄土」という言葉は、「西にある阿弥陀仏の浄土」という意味なのですが、どのように考えたらよいのでしょうか。

西の空。

私たちにとって、もっとも身近なものは、夕日ではないでしょうか。雄大な太陽、それは、辺り一面をまっ赤に染めながら、静かに、そして、ゆっくりと沈んでいきます。この光景をまのあたりにして、しばし時を忘れ、いい表すことのできない感動を覚えられた方もいらつしゃることでしょう。このような大自然の美しさは、日頃の喧騒けんそうから私たちを解き放ち、心を洗い流してくれるかのようです。

夕日の沈んでいく光景は、「西にある阿弥陀仏の浄土」に思いをめぐらせるために、『説観無量寿経』というお経のなかにも描かれています。

ただ、「西にある」と申しますと、「地上のどの辺りを指しているのか」とお考えになるかもしれません。そこで、方角ということについて考えてみましょう。私たちは、行き先や居場所を伝えるために、東西南北という表現を何気なく使っていますが、実際に私たちの周りにある山にも河にも海にも、どこにも東西南北とは書かれていません。それは、私たちが地上のどこに立っているのかわかるように、自然のなかに東西南北を定めているだけですから、お経に「西にある」と説かれているのは、地上の特定の場所を指しているのではなく、「私の立っている場所から西にある」ということを示しているのです。

しかし、どうして「西にある」と説かれているのでしょうか。その答えは、私たちのもの見方や考え方にあります。私たちが、東西南北という目印を見失ってしまったら、どのようになるでしょうか。たちまち、どこへ向いて歩いているのかわからなくなり、家に帰ることはおろか、命の危険にさらされるような場所に、ふらふらと足を運んでしまうかも